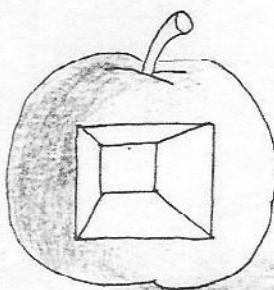
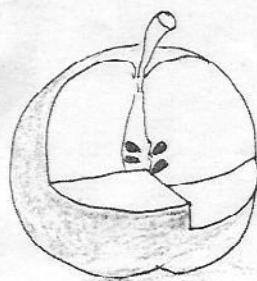


中島興の ビデオソフト学入門④



魔城羅王像 この王は美出尾のシンボル像で、5つの目を持った美出尾王である。そして、この王は琵琶を奏する音像一体の王で、密教界における映像の王である。以後おみしりおきを。

ソフト学流リングの切り方



木的人間の ソフトワーク

前号では、古代中国の「陰陽学」や「算命学」の五行説といった分類法を適用しながら、木的世界、木的人間のソフト学を考えてみた。今回はインドで生まれた密教と、中国で変化をとげた中国流の密教を比較しながらビデオと密教の関係、さらにそこから木的人間のソフトワーク（ビデオ作品づくり）を考えてみることにしよう。

ご存知のように木の外観は1本ごとに異なるといったように多様であり、また季節によっても変化する。その結果、木の構造はランダムで、きまついたシステムもないといったふうに私たちの目に映りがちである。しかし、木の外形を形づくる枝や内部構造は実にシステムティックに構築されている。

こうした外と内の分離、二面性が木的システムの特徴で、このような精神（心）構造を持った人間、そしてまた、こうした木の構造の特徴を発見できる精神を持ち、そこから自分のシステムワークを発想できる創造力をもつた人間を、「木の人間」とソフト学では言う。この「木の人間」の持つ性格については第1号で説明したが、ここでもう一度念のために「木的性格」（木性）を人間にあてはめた例をあげておこう。まず、「ガンコな巨木の人間」「ツタのように誰かに巻きついていないと生きられない

人間」「野草のようにふまれてもふまれても息づいている人間」「次のように燃える性格の女に弱い枯れた人間」そして「竹のようにフシのある人間」といった具合である。

こうした「木の人間」は自分のソフトワークを考える前に、木にとって自然とは何か、人間とは何か、ものを作ることとは何か、さらに木とビデオの関係とは何かということを考え、そこから自分のソフトワークを追求してもらいたい。

密教によれば、地球は宇宙の箱庭であり、宇宙のさまざまな現象が地球上に集約されていると先号に書いた。この考え方方はさらにさかのほり、その箱庭（地球）のなかにある木・火・土・金・水の五元素のひとつひとつの中にも、また、その五元素と密接な関係にある人間の体（五体）や、その人間の生命を支えている五臓（心・肺・脾・肝・腎）、そしてそれらの五臓を機能良く働かせる血液やホルモン、分泌液、さらにそれらを支える小さな細胞のひとつひとつのなかにも宇宙は広がり、生命の営みがあると言及している。

この「すべての万物は宇宙なり」という考え方方は、古代中国人の自然科学の根源であり、中国・インド独自の「箱庭宇宙論」という考え方である。それを密教流に言うと、地球上に存在するあらゆるものの中には宇宙——仏があり、人間の髪の毛1本、木の葉1枚に宇宙があるということになる。

この「箱庭思想」は日本では「盆栽」に集約されている。小さな空間に、長い年月をかけて広大な宇宙を

構築する、いわば自然を鉢という器の上に擬似モデル化（シミュレーション）するわけである。それこそ何代もの子孫が、1本の木を育成（シミュレート（注1））していく。このいわば「宇宙栽培法」とも言える盆栽は、日本独特のものであり、木的世界独特のアートである。読者諸君も100年ぐらい経た盆栽を観ると良い。そこにこそ、木の人間の「ビデオソフト学」の源流があるのである。

算命学と密教とビデオソフト学

それでは、まず、算命学（儒教）のシミュレーションワークである五行説（注2）と陰陽学（注3）を、密教の世界を構築する要素群と比較しながら、ビデオソフト学を考察してみることにしよう。

算命学の最大の特徴であるその自然観察法は、まず人間が大地に立って、そこから地平、地面を見渡した時の観察法で、五行説の五元素（木・火・土・金・水）をもって自然を分析、分類、体系化したものである。つまり、算命学は地平からの平面分類法だったわけである。ところが同じアジア（東洋）でも、インド生まれの密教は大地からさらに天空を見上げ、自然をタテに分析、分類した「地・水・火・風・空」という五行説を作り出した。つまり、中国は自然を「ヨコ軸（X）」に、インドは「タテ軸（Y）」に分類し、その理論を体系化していったわけである。

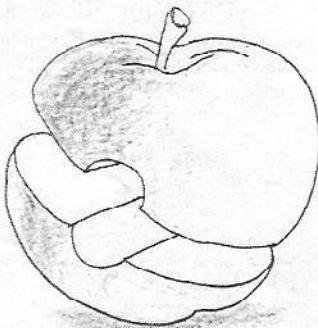
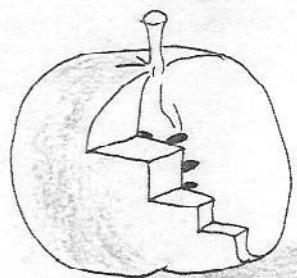
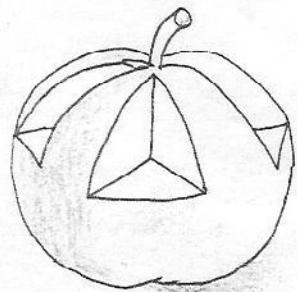
しかし、このインドの密教もネパールやチベット、そして中国、日本へと渡る間にそれぞれの国の自然や風土に合わせてさまざまに変化した。たとえば、前述のように中国では自然や人間関係をヨコ思考（ヨコ軸）で捉え、インドではカースト制度に表わされるようにタテ思考（タテ軸）でそれらを捉える。だが、日本では人間関係はタテ軸で、自然はヨコ軸で捉える。これはインドと中国の密教である純密と雑密がミックスされて、日本に伝来したからである。つまり日本人の自然観は中国流で、人間関係はインド流なのである。

それではここで、インド密教のシミュレーションエレメントである五行説の地・水・火・風・空をみていくことにしよう（図1）。

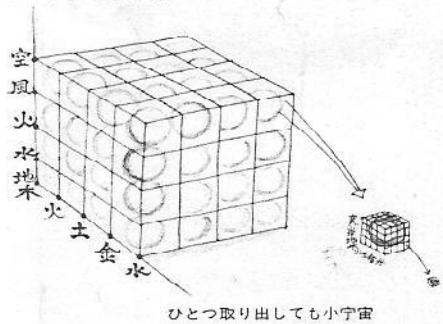
インドでは五行を五大（五原理）といい、それに入間の「心」を入れて六大（六原理）という。さらにその「心」を「心・識・覚・智」という4つの精神的原理に分類した。では、何故、印度人は自然を中国のように木・火・土・金・水と分類せず、地・水・火・風・空と分類したのだろうか？ その理由は言うまで

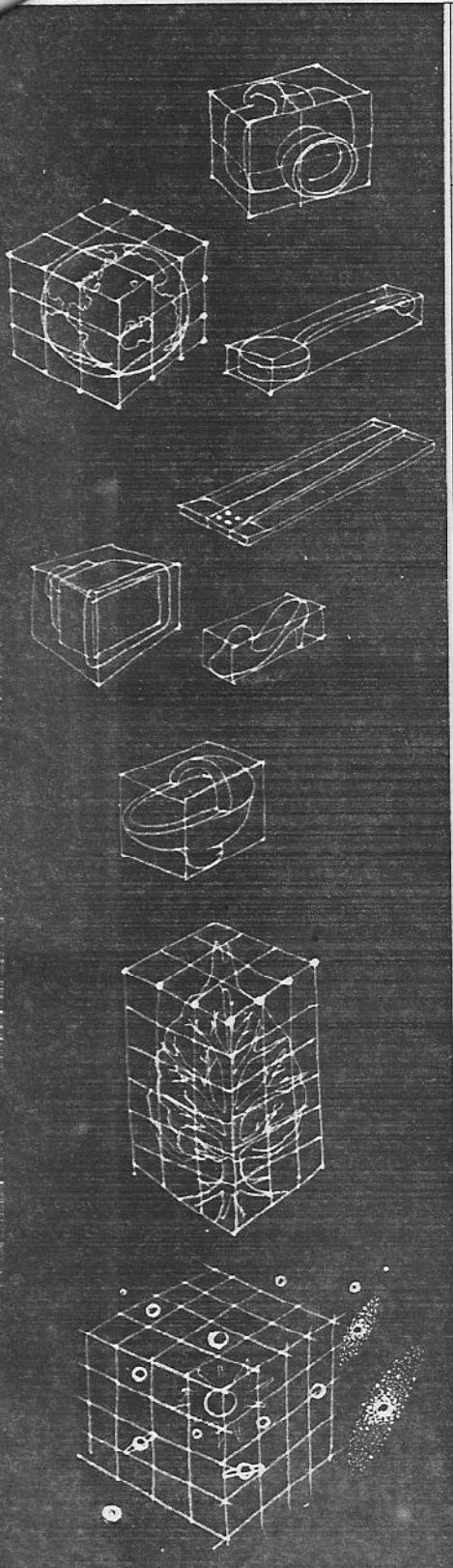
五大	外 界	身 体	
地	山 岳 大 地	骨 筋肉	肝 脾
水	大 海 池・川	血液 内 分泌液 小便・アセ	腎 脏
火	太 阳 雷 マグマ	体温	心 脏
風	台 風 砂じん	呼吸	肺 脏
空	大気(空気) 宇 宙 空 間	身体の中の 空間・すき間	脾 脏
人間の「心」			

図1



ソフト学の宇宙空間はルービックキューブ





もなく、インドの自然風土、地理的条件にあったのである。

密教を日本に紹介した空海（弘法大師）は、

六天無碍にして、常に瑜伽なり

四種曼茶 各々離れず

三密加持すれば速疾に顯わる

重重帝網なるを即身と名づく

と、言っている。このなかの「六天無碍にして、常に瑜伽なり」とは4つの精神的原理を動かす心を説いたもので、いいかえれば地・水・火・風・空という五元素を「心・識・覚・智」という4つの心の世界を加えて立体的に構築しようとしたのである。

また、「四種曼茶 各々離れず」の四種曼茶とは、大曼陀羅、三昧耶曼陀羅、法曼陀羅、羯磨曼陀羅という4種の曼陀羅のことである。つまり、大曼陀羅とは菩薩を描いた曼陀羅、三昧耶曼陀羅とは菩薩の標識、剣、輪宝、金剛、蓮華などを描いた曼陀羅、法曼陀羅とは梵字を描いた曼陀羅、羯磨曼陀羅とは菩薩の動きを描いた曼陀羅を指す。

また、密教では五箇微身説といって、自分の身体を五大に区分する。これは五重の塔の発想の根源でもある。これによるとまず足を「地」とし、腹（内臓）を「水」とし、心臓は鼓動し、燃焼するので「火」とし、さらに呼吸する肺（胸部）を「風」とし、頭部を「空」とした（図2）。そしてさらに左手を現実界、右手を密教（仏教）界とし、両手を重ねることによって、現実世界と仏の世界が一体となり、また、両親指を軽く接すると地・水・火・風・空の五大のシステムと自己の「心」が合体す



図2

るとしたのである。これを「勿論色心不二、通法界の識大はそこに現成する」と説いたのである。つまり、図2にあるように地大・水大・火大・風大・空大を支配している人間の体と大自然、大宇宙のなかに存在する五バターン（地・水・火・風・空）は同一であると想定し、一体であるが故に「わが身は仏であり、仏身がわが身であり、自己のなかに仏が宿り」、つまり相互が無限に鏡のように映し合い、自己のなかに全世界（宇宙）が反映されると説いたのである。そして、この“存在していることが佛である”という認識が、生きる喜びを100%肯定するインド密教の特徴なのである。その生命的の肯定を密教では「即身成佛」という。

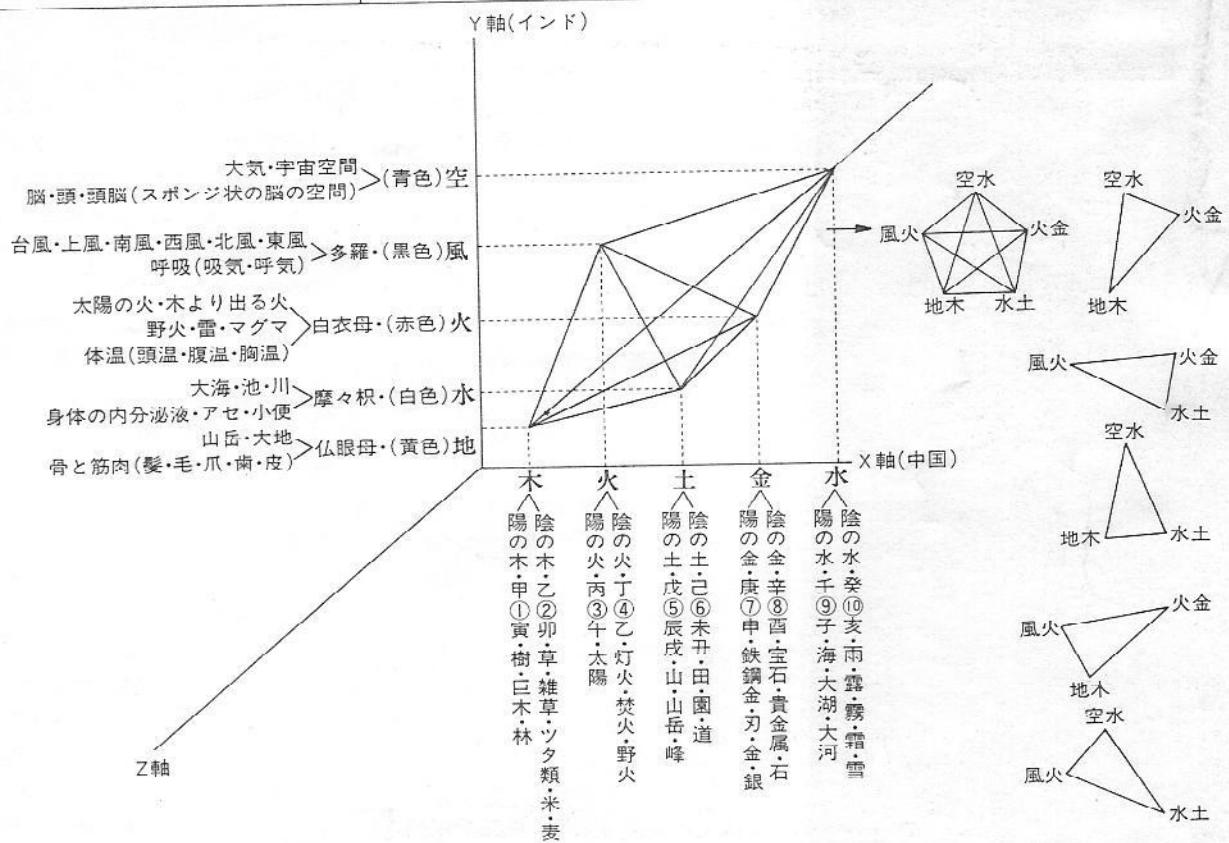
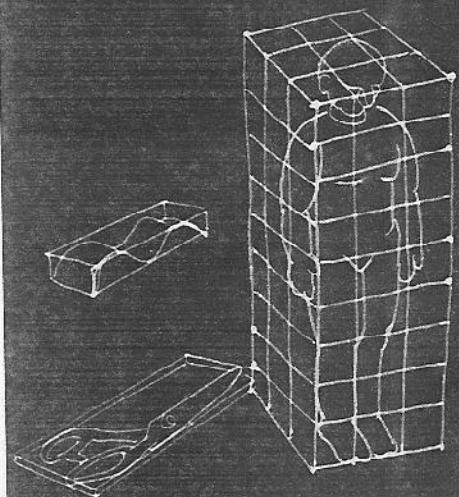
では、ここでその密教の精神にビデオソフト学をあてはめて考えてみよう。そのためには、まずビデオがいかなるメディアであるかを知っておく必要がある。

結論を先に言ってしまえば、ビデオはきわめて密教的なメディアであり、「即身成佛」的メディアであると

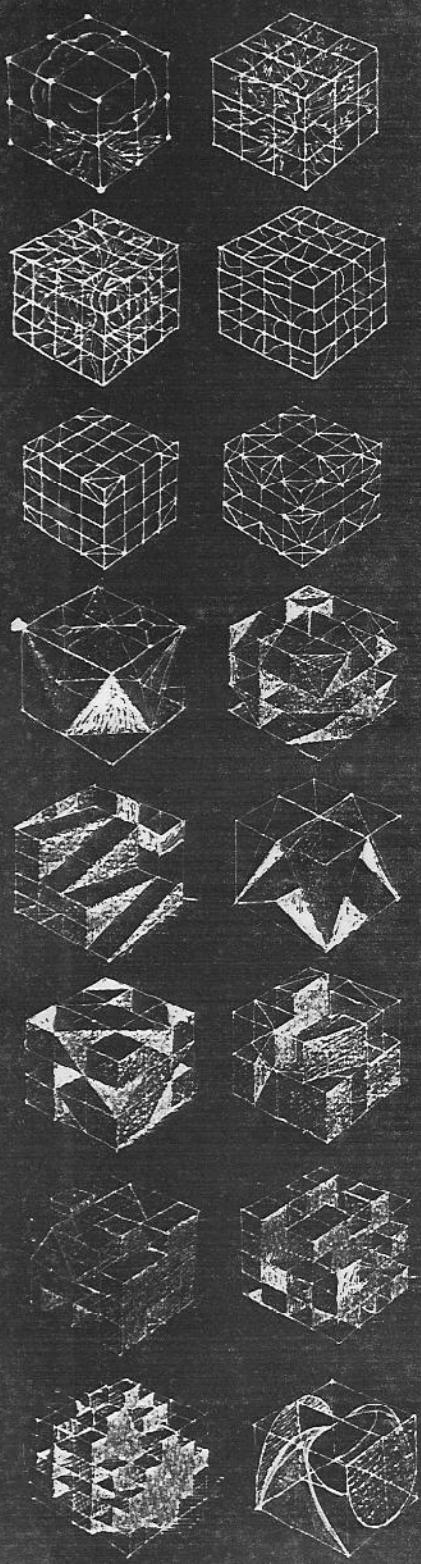
いうことである。つまり、密教が「今、この瞬間をどう生きるかという生命の讃歌」をシミュレーションしているのと同様に、ビデオもこの自分の人生の持ち時間「今」をどう写し撮るかという点に、また、ビデオは「今」のこの瞬間を確実に捉えることができ、そして、そうしてこそその特性が発揮されるメディアであるということなのである。

中国の算命学における分類法で作られた五行説(木・火・土・金・水)が地平的で平面的な心で構築された静の宗教だとすれば、さしづめイン

ト密教の五大(地・水・火・風・空)は動のシミュレーションワークで構築された宗教であり、動くことが生命の起源である。ビデオもまたインド密教同様、動を失ってしまえば、そのメディアの本質を失ってしまう。「動くこと」これがビデオの根源である。よって、ビデオソフト学の心得を構築するためには「動の宗教」であるインド密教の分類法を、少々拝借してみる必要があるだろう。それには、中国・インド両宇宙論を合体させてシミュレートした「立体相関図」を作り、それをこのソフト学



3



木の3D（3次元）モデル

の眼をもって、考察してみるのがいい方法だろう。まず、動的なインド密教の五大「地・水・火・風・空」をタテ軸（Y）にとり、ヨコ軸（X）に静的な中国算命学の五行「木・火・土・金・水」をとり、そしてZ軸にわがソフト学をとて、ビデオソフト学を立体的にシミュレートしてみる。

そして、「木と地」「火と水」「土と火」「風と金」「水と空」といった具合にXY軸を組み合わせてみる。「地と木」とは言うまでもなく母なる大地にそびえる木々の世界、つまり林や森、山林（ジャングル）の世界である。「火と水」とは雨空に光る雷光の世界であり、火と水の対立するすさまじい世界である。「土と火」とは土をこねて形をつくり、窯（火）に入れる陶器づくりの世界である。「風と金」とは熱風を送って金属を熔かす精錬術の世界である。「水と空」とは雨乞い、つまり呪術的世界であり、また航海術の世界（海運）もある。

さて、ここに分類しシミュレートした世界はすべて“発想の基礎”になる「基礎工事」である。つまり、図3にあるようにX軸とY軸の接点にあるひとつの空間（モデル）——小宇宙を見しなければならないのである。そして、たとえば自分が地・木的性格（注4）であり、地・木的人生観や地・木的考え方を持っているとしたら、地（土）と木との関係は自分にとって何であるのかということを考えてみる必要がある。

応用

それでは、ここで“自然是エコロジカルである”というサイクル説である中国・インド流の「相生説」の運動論を参考にして、「発想の基礎工事」を考えてみよう。この相生説とは、木は火を生み出し、灰になり土を生み出し、土は石（金）を生み出し、石（金）は雨水を洗い水を生み出すといった循環理論である。この説はインドで生まれ、中国の五行説とともに成立した説である。試しにこの理論を「地・木」にあてはめてみよう。

前述したように大地（土）は木を育てる。しかし「水」がなくては木は育たない。そして火は木を燃やし、木は灰となり地（土）に帰る。このように土・木・水・火の関係は切っても切れない相生関係・循環関係にあることがわかる。

この相生関係を利用することがビデオ作品のプランニングおよび製作をすこぶる円滑に運ぶ秘訣なのである。「土（地）的思考」「木的思考」「水的思考（注5）」「火的思考（注6）」というように4つのシステムを四位一体化させ、循環作用を働かせれば良いのである。すると木がスクスクと育つようにソフト学が成長し、その姿が見えてくるはずである。

つまり、たとえば木の人間であれば、木の人間にとて必要な人間は何の人間なのかを考えてみることである。それは相生関係でみたように土の人間であり、水の人間であり、火の人間である。しかし、それらの人間

相生説の

を見つけるにはどうしたら良いか？

その方法として、ビデオによるインタビューがある。木的人間は外見と内面がちぐはぐなので、インタビューではいつもとまどうが、木的人間が最も早く出会うべき土の人間は案外早く出会うものであり、また意外に身近にいるものである。それは土の人間が木や草を育てることに対して、義務感のようなものを持っているからである。そして、インタビューでは土の人間にたっぷりとおしゃべりをさせ、そのなかからヒントになるものをピックアップすることである。ピックアップに関しては、木の人間（情報人間）は天才的につまいところがあるので、“構造的”に良くまとめあげてしまうだろう。

しかし、次に必要な水、水の人間は見つけても、なかなか発想のヒントを与えてくれない。それは水の人間が無口で、必要なことだけしかしゃべらないといった性格を持っているからである。そこで木の人間は水の人間がよくしゃべるようにするために、金の人間を介入させなければならない。水は火で燐かし、叩いて伸ばした石を冷やして固く強くし、金属に仕上げるというように金（石）に盲目的な義務感を持っている。それを利用することである。つまり土の人間から発想のヒントを吸収し、そこから生まれたアイデアを水の人間と金の人間の会話によって練り上げ、組み立てるというシステムを作り出すことである。

また、ビデオレターを送るという方法もある。これは木の人間にとつては最高のコミュニケーション方法

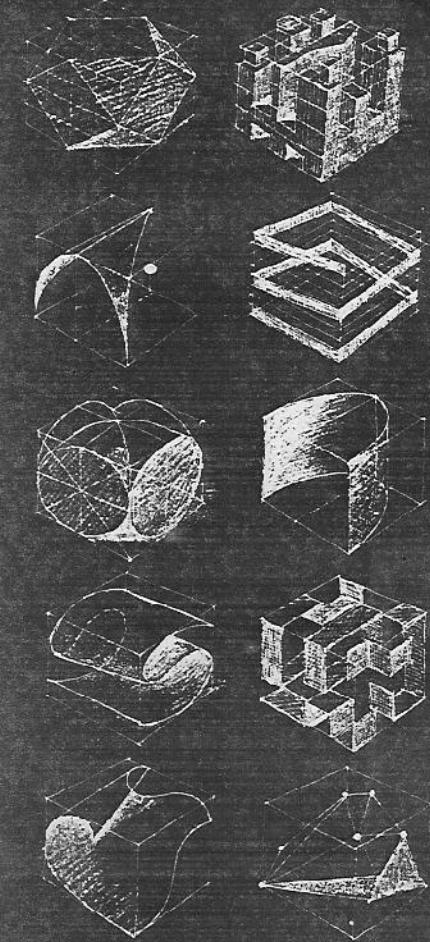
といえる。まず、最初に土の人間に送り、次に水の人間に送る。しかし、ここでも水の人間はコミュニケーションをしようとしている。つまりビデオレターを見ようとしているのである。水の人間がビデオコミュニケーションを必要としないからであるが、それは水の人間の考えが水の原子のようにひとつに固まっていて、他のものを信じようとしない、つまり、ひとつの考えを強い求心力をもって深く思考する人種だからである。よって水の人間には直接コミュニケーションするのではなく、金の人間にビデオレターを送り、金の人間から水の人間にそれを送らせるといった手順をふむべきである。必ず、金の人間を間に介在させることである。

そして、木の人間は木の成長過程に見られるとおり点（種）から線（芽）へ、線（幹）から線（枝）、線（枝）から面（葉）、面から立体（実）へというように、自分の創造力（思考）を構造的にネットしていくなければならない。

ビデオを撮る時も同様で、いきなり撮るのではなく、まず点から線にするにはどうしたら良いか考えなければならない。そのためには、自分がこの人は土の人間だ、水の人間だと思ったらひんぱんにコミュニケーションをはかることである。それが木の人間のビデオ作品づくりの出発点なのである。

以上、木の人間の作品づくりについて述べてきたが、このなかからイメージがわいてきたら、それを本誌最終ページのポストカードに描いて送ってほしい。

（映像作家）



（注1）たとえば、ここでは自分の“理想とする”自然の木をモデルに本物を超えてしまうものを作り出すこと。

（注2）自然是木・火・土・金・水という五つの元素で成り立ち、自然もそれらの五つに分けられるという古代中国で生まれた考え方。たとえば、木星、土星といった「五つの星」、人間の肉体（五体）には「五感（視覚、聴覚、味覚、触覚）」というように、人間の性格も木の人間、火の人間などというように五つのタイプに分けることができる。詳しくは第2号参照。

（注3）五行説よりもはるかに古い古代中国の思想。自然や物ごとはプラスとマイナス、陽と陰といったようにふたつに分けられるという考え方。たとえば男（陽）と女（陰）、天（陽）と地（陰）というように、詳しくは第2号参照。

（注4）木のさまざまな存在形態を分析し、そのデータを「木的性格」と名づける、不思議にその木の持つ性格にあてはまるようなタイプの人間がいる。地（土）的性格とは“母なる大地”というように、自然界のすべてを育む根源であり、故に“静的”で静かな守りの概念をなしている。詳しくは第1号参照。

（注5）水にもいろいろな形態があるが、共通する水の性格とは、雨がやがて大河となるように、水同士の連帯感、そして巨石をも切断してしまうほどのパワー、そこに特徴がある。詳しくは第2号参照。

（注6）火は燃えるものがないと存在しないように、何か燃えるもの（他者）がないと存在しない。故に火の人間の性格とはひとりで存在できない。そして、ある時間のなかで燃えつきてしまうように移り気な性格である。詳しくは第1号参照。